ぶっくレビュー

『市場経済の中の日本農業』
～縄文時代からデフレ・自由化時代まで～』
炭本昌哉著（農林統計協会）

労作であるだけでなく、非常に大胆、結果的には野心作ともなっている、というのが本書についての率直な感想である。

本書は九七年に刊行された『デフレ・自由化時代～市場メカニズムの展開と限界～』の、『デフレ・自由化時代の協同組合～縦割り法制から統一法制へ～』（九九年刊行）に次ぐ各論編の第二弾である。

本書のねらいは「これまでの日本農業についての通念を打破する」ところにあり、その〝打破〟されるべき通念として、「第一に、日本農業は、稲作中心の自給自足的なもので、市場経済にはそぐわない。第二に、農業、とくに日本農業には、経済一般とは異なる農業固有の論理が存在する。第三に、日本農業は、家族経営中心であって、企業経営が広く成立することはない。」の三つをあげるとともに、「この日本農業についての通念は、二〇世紀におけるインフレ・規制時代の産物である」としている。そして第一の「稲作中心の自給自足的なもの」であることを〝打破〟するために、そもそも「稲は、日本列島原産の植物ではない。日本の気候風土にもともと適していたわけではない。」として、農業の歴史を縄文、弥生の時代にまで遡ってもいる。こうした日本農業の位置づけを踏まえて、日本農業再生のためには、①農産物需要の変化に対応した農業生産構造の変化、②農業における経営の効率化、③創造性豊な担い手の育成・確保、そしてこれらの前提としての④農業の全面的自由化、を打ち出している。

本書の基本にあるデフレ・自由化時代の歴史的位置づけ等についての評価はその道の専門家に譲らざるを得ないが、ここでは農業に限定していくつかあげておきたい。

まず第一に、「農業は、技術的にはともかく、経済的には、一般産業と本質的に異なる産業ではない」との認識についてである。目下、ＷＴＯ交渉が行われており、そこで我が国における農業の存在意義として食料安全保障とあわせて農業の持つ多面的機能の発揮が掲げられているように、経済価値だけでなく、非経済的価値についての評価がきわめて重要であると考える。今、一方では経済価値だけで〝豊かさ〟を測る、経済学の意義・意味が盛んに問われてもいるように、複眼的視点での整理が必要であるように思われる。第二に、水田稲作は外来のものであり、水田を開田していくために筆舌に尽し難い先祖の汗水を必要とし、また冷害・凶作の歴史を経てきたことも確かである。しかしながら、たとえ外来であっても、二千年余の時間の経過の中で技術の進歩をも踏まえて適地適作化し、主食としての地位を形成し、地域ごとに多様で豊富な食文化の中心をなしてきた歴史的事実は重い。食料安全保障は食料、主食としての米を守るだけでなく、食文化、さらには農村文化とも一体をなしているのである。

第三に、全面自由化したとしても、米以外の外来の適種が導入されるとともに、新規参入の増加、流通の多様化等国内農業の再編によって活性化が期待できるとしているが、傾斜地が多い我が国では、土地利用型作物での国際競争力確保は困難である。

著者が摘出しているとおり我が国農業は多くの問題を抱えており、また耳を傾けるべき提言も多い。要は、経済学的アプローチによって設定された問題の中で、市場原理だけでは対応不可能な我が国農業の限界部分についての、現場と学際的議論を踏まえた現実的対処が重要と考える。

（二〇〇二年九月、二一九頁、二、七三〇円）

（蔦谷栄一）